

中村久子の生死観と超越（下）

鍋島直樹

序

人生の危機に直面して、人は心の大切な依りどころを探し求める。闇の中に星空が広がるように、絶望の中にも救いの光は届いている。しかしそれに気づくのはむずかしい。本論では、第一に、中村久子が五十歳をすぎて自らの過去をふりかえり、両親の言動に真心がこもっていたことに気づくところや、中村久子が親鸞の教説を学び、真実の宗教が何であるかを解明するところに焦点をあてて考察する。第二に、晩年の中村久子が記した文章表現に注目し、「生かざるいのち尊し」と歌った意味を考察する。本研究にあたり、岐阜県高山市の真蓮寺、中村久子女史顕彰会に所蔵されている中村久子の遺品や著述を調査し、三島多聞住職や久子の娘、中村富子に教示いただいた。中村久子口書きの新資料『法味手帳』には、久子が心の支えとする先師の言葉が記されていて、中村久子が苦難の中で人生の羅針盤となる教えを大切にしていたことを知った。中村久子が親鸞の教説によりながら、「どんなところにも必ず生かされていく道があります」と力強く語った彼女の生き方に学び、生死を超える道を明らかにしたい。

一 亡き父と母への感謝―中村久子にみる求道の足跡

では、中村久子の宗教遍歴を顧みる。あわせて久子が大人になってから、両親に対して感じとっていく御恩報謝の気持ちについて考察する。

中村久子は、三歳から四歳にかけて両手両足を切断する手術を受けた。父親の釜鳴栄太郎は、手足を失った娘の久子救いたい一心から、天理教に救いを求め、神の利益を得ようと必死に祈った。娘の久子も神を信じれば、両手両足がはえてくると父親から聞かされていた。父が亡き後も、移り住んだ自宅の向かいにあった天理教の集会所に行き、二十歳の頃までその教えに触れた。同時に、父との死別後、母方の祖母、丸野ゆきに養育され、浄土真宗の教えを聞きながら育った。それでは、中村久子はこの父親の傾倒した宗教をどのように見ていたのであろうか。

中村久子は、『歎異抄』第二章によりながら、亡き父親が自分のためにしてくれた祈りについて、深く感謝して受けとめている文章がある。中村久子が五十五歳の時に出版した『生きる力を求めて』に、こう記されている。

昔、ある人が十余ヶ国をはるる越えて、京の親鸞様をおたずねになり、往生極楽の道を問われたとき、親鸞様は、

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と仰せになりました。

親鸞様はただ念仏だけをして、仏に助けられている、という、あの歎異抄のお言葉を、私はしみじみ味あわせて頂きながら、申し上げますことは、

「私は学問もなく、信仰も皆さまとちがつて何も持っておりません。お念仏が最上の宝物と、きかせて頂いております」

そんなことは今更聞かんでもよく知っている、という顔で、物足りなさそうな姿を見ますとき、失礼ながら、真実のお念仏のみ声が、心の奥底にひびき渡っていないのではないだろうか、と私は思うのでございます。

夕暮れどき、山の端に入陽の沈むころ、しずかになったお寺の書院で、一人瞑目しながら、我が心のみつめさせていただく時があります。

長い年月、私は天理教の神様は父を早世させて、私の手足を治して下さいらなかったことを、恨むまでにはならずとも、いい感じを持たずに過ごしてきました。が、ある日思ったことは、ほんとうにご利益はいただかなかつたのだろうか、という事でした。

いいえ、立派にご利益は頂いていたのです。なぜならば、五十何年か前に亡き父が火の玉のようになって祈り、願いを神様にかけて下さった時、切り落としたときの手足が今よりもっと長かったら、それに痛みも苦しみも無かったら、一体私はどんな心で今日まで生きてきただろうか、そこに思い到ったのです。

苦しい時、悲しい時、神や仏に無理な祈りや願いをかけることは当然のこと、そして宗教とはこんなもの、と信じ込んで、これを容易に納得していたら、おそらく今つかんだ真の仏の正法と、真実の道を求めようとはしなかったにちがいない。

亡き父は肉体にとらわれず、真実の道を歩み行けよ、と教えてくれていたのです。父の心こそはまさしく広大な「仏心」だったのでございます。

前にも申しましたように、沢山の善知識（師）の方々によって、教え導いただいたお蔭さまで、ここまで連れてきて頂きましたが、ほんとうの善知識は、先生たちではなく、私の体、この、「手足のない体こそが善知識」だったのです。

なやみと、苦しみと、悲しみの宿業を通して、よろこびと、感謝にかえさせて頂くことが「正法」でございます

した。

親鸞聖人さまの、みおしえの「たまもの」と思わせて頂きます。⁽¹⁾

ここに明らかなように、久子は、自分の父親が手足の失った娘を救いたい一心で、神仏に祈願したことは当然なことであると受けとめながら、しかし、真実の宗教は、神仏に頼みごとをして自らの願いを満たしてもらうようなものではないと記している。現実には、父親がどれだけ神に祈ろうとも手足が長くなるわけでもなかった。むしろ、手術をくりかえして久子の手足は短くなった。この事実からも、神仏に願いをかけるという行為が真実の道ではないことを、久子はごまかしのきかない自分の身体から学んだ。やがて、久子が大人になってより深く考えてみれば、自分の父親が悲しみの中で祈らずにいられなかった姿勢は、娘の久子に「真実の道を歩み行けよ」と教え導く父親の声であったと、と久子は受けとめなおした。ここに中村久子は、父親の祈願行為の中に、必死になってわが子を救おうとした親の愛情と真実を探索する姿勢を感じとっていったことがわかる。

しかし、なぜ中村久子は、逆境にありながら、いわゆる願い事をかなえる宗教、病氣治しの信仰に走らなかったのであろうか。それについて、中村久子は、次のように記している。

苦難のどん底にあえぎながら、何の救いの声にも、手にも、なぜ私はすがらなかったのでしょうか。その頃（大正、昭和の初め頃）には新興宗教という、お金もうけ、病氣なおし、災難よけ、等の人の心を引きつけるものは無かったのでしょうか？

いいえ、そうしたものは何時の頃にも、いっぱいようよしております。人間のどん底にうごめいている私に、さそいの手も言葉も、いやというほどございました。

でも、何が私をそうさせなかったか。

私の父は真宗門徒でありましたが、私の病気を治すため、親族会議をふりきって天理教に走りました。貧乏のどん底におちいりながら、三年間、火の玉のようになって信仰しました。

父は天理教の布教師から、あなたは若い頃、女色の関係があつて、それが原因となつて、今、娘さんが手足を切り落とさねばならない程になつてゐる。この恐ろしい因縁を根本から断ち切つて、病気を治したい、と思われらるなら、神様へ一心に懺悔しなさいと、言われ、真夜中に降りしきる雪をものともせず、集会所へ行かれる道で、「かんにんしてなア、おとつあんがわるかつたんや。この通りあやまる。どうかゆるしてよなア」とわびられました。

その父は七歳の私を残して三十九歳で亡くなりました。母は父が亡くなつたとき、天理教の布教師から、「ご主人のさんげと、尽くし運び（金品を捧げること）が足らなかつたので、ご利益の方はどうも……。」と言われました。

私は母の再婚先が天理教の集会所の前だったので、二十まで大半の時間を天理教でくらし、人から私は「天理教の久ちゃん」といわれました。

けれども、先生から教えを聞けば聞くほど、私の心は年と共に、天理教から離れて行きました。

理由は、あれほど信仰した父はあつけなく死に、私の手足は四本とも短くなつてしまつたではないか。

お可愛そな父上、お気の毒なお父様、久はどんな苦しみにも、悲しみにも負けないで、手足こそ無いが、きつと強く正しく生きて行きます。

ご安心下さいませ。いつとはなしに、私の心の奥そこに、こうした固い信念ができましたことは、やはり亡き父の魂がみちびいて下さつたと思います。⁽²⁾

ここに明らかなように、中村久子は、現実が好転するように神仏に祈る人間の心情を理解しながらも、父親が三十九歳で亡くなった時、天理教の布教使から、あなたの父は「懺悔と尽くし運び（寄付）」が少なかったから利益をえられなかった」といわれたことを縁として、利益ばかりを願う信仰がはたして真実の宗教であるかどうかを疑問に感じた。こうして中村久子は、願い事充足のための希願請求に落ち着かず、さらに真実を求めたことがわかる。しかも、亡き父が久子の病気が治るように祈ってくれたことに感謝して、その父親の行為が苦しみや悲しみに負けずに生き抜く信念を与えてくれたと受けとめている。ここに中村久子が、娘のために救いを求めつづけた父親に対して深いご恩を感じていることがわかる。

次に、中村久子は、母に対してもその亡き後で深いご恩を感じ、六十九歳の時に、悲母観世音銅像を建立した。その「悲母観世音銅像建立発願文」には、こう記されている。

洗うが如き極貧の中に四肢切斷の私を抱え、夫に死別後再婚なし、あらゆる苦境の中にもかかわらず、人間として女として、生きて行くことの出来るまでに、正しい愛情ときびしいお膳を以て愛育して下さったお蔭で、見世物小屋の中にも二十数年を無学で無一物の体で、その後も「生き抜く力」を心にしっかり植えつけて下さったのは、母のご恩に他ならぬのであります。

身体障害、精神障害等のお子様は現在数十万人に上っております。順次社会福祉も充実されてはまいりますものの、殊に母なる人の悲しき切なさ他人のうかがい知る限りではありません。

念願の「悲母観音像」が世の悲しい親ご様のお心に、こんな母もあつたのだ、と少しのささえにでもして頂きますれば、この上ない幸せに存じます。⁽³⁾

また、『無碍の道』には、母のご恩について、中村久子がこう記している。

不具の子供を思う母の心は、世の母にお心よりも幾百倍のものでした。十一才の夏より（手足の痛まないと
き）、母は私にきびしい躰が始まりました。衣類のほどきもの、おそうじ、いろりに火をたく、小さな洗濯な
ど、普通の母だったら、おそらく何もさせられはしなかったでしょうが、手足のない娘が自分のこと一つも出来
なかつたら、自分が死んだら、この子はどうして生きてゆくだろうか――、少しのことでも自分出来るように
しておかなければ可愛そうだ、と思われての結果、一つ一つをさせられました。どれだけ工夫しても、考えても
出来ず、心の中で母をうらみに思ったことも、いく度ありましたか。でも短い腕先と口を相手に、歯が大半の仕
事をしてくれました。お裁縫、編みもの、へら付け、その他室内のことはともかく、何かと出来るようになった
ことは、母のお陰さまでさせていただけに、心にしていただいたことは、終生忘れることの出来ない、大き
なご恩の賜でございます。⁽⁴⁾

麻糸を幼い久子の前に置いて、口の中で結び合わせるようにさせたことなど、母親の厳しい躰に対して、久子是最
初、恨みに思うような時があった。しかし後になって、厳しい躰をする母の言動に、母親の言うに言えぬ悲しみと、
だからこそわが子の自立を願う、母親の真の愛情がこもっていることを、中村久子は深く気づいた。さらに、母から
久子が受けた愛情が、障がいを持って生まれた子供をもつ母親たちすべての悲しみと愛情に思い重なっていった。中
村久子にとって、母こそが大悲の菩薩のような存在となった。こうして昭和四〇年九月三日、久子が六十九歳の時に、
自分の母への御恩報謝の気持ちを含め、また、多くの障がい者とその親たちの心の礎になるように、久子は悲母観世
音菩薩像を国分寺境内に建立し、その開眼法要を謹修した。注目すべきことは、この悲母観世音菩薩像が抱く幼子の

姿である。その幼子の像は両手両足がないまま悲母観世音を見上げてほえんでいる。そこに深い安心と希望を見出すことができる。

「悲母観世音菩薩さま」という歌の作詞をした吉村比呂詩の言葉にも、そのような母の子を思う限りない優しさが満ちている。

声をかぎりに 母の名よべば

花のおもかげ やさしく浮ぶ

ああ生きる日の哀しみも

み手にすがれば 涙にとける

うれし なつかし 観世音

悲母観世音菩薩さま⁽⁵⁾

さらに、中村久子の口書きした『法味手帳』に、次の詩がつづられているのを発見した。新資料の『法味手帳』とは、中村久子が自ら読んだ聖典や本の中から、心に残ったものを書き留めたノートである。⁽⁶⁾

無常 ヘルマン・ヘッセ

命の木から葉が落ちる

一枚、また一枚。

おお、めくるめくばかり

華やかな世界よ

なんとお前は満ち足りせることか

なんとお前は満ち足りせ疲れさすことか

なんとお前は酔わせることか

今日まだあつく燃えているものが

まもなく消えてしまう

やがて私の褐色の墓の上を

風が音立てて吹き過ぎる

幼な子の上に

母が身をかかめる

母の目を私はもう一度もう一度見たい

母の眼差は私の星だ

他のものはすべて移ろひ

消えさるがいい

すべてのものは死ぬ、喜んで死ぬ

永遠の母だけとはどまつている

私たちのやってきた母だけは

母のたはむる指が

はかない虚空に

私たちの名を書く

この詩はヘルマン・ヘッセの書いた「無常」(Vergänglichkeit)という詩であり、彼の詩集『放浪 Wanderung』(一九二〇年)の中に収められている。この詩の中でも、「母の目を私はもう一度見たい。母の眼差は私の星だ……永遠の母だけとはどまつている」という言葉には、今は亡き母へのこみあげるような切なさがあふれている。中村久子は二十四歳の時に母を亡くした。その頃の久子は、母の厳しかったしつけや見世物興行界に娘の自分を働きにいかせたことをよく思っていないかった。しかしやがて、久子が家庭をもつて子どもに恵まれることを通して、母の厳しさの中に娘への無限の愛情があったことに気づいた。そういう母への思慕がふくらむなかで、このヘルマン・ヘッセの詩が、久子自身の気持ちを表現してくれているように感じたのであろう。

二 中村久子の見出した真実の宗教観

ここでは、中村久子が見出した真実の宗教について考察する。中村久子は、昭和四〇年、六十九歳の頃に、『無碍の道』を執筆した。この『無碍の道』の書は、アメリカの浄土真宗本願寺派西羅府(西ロスアンゼルス)別院の開教使、藤村文雄が、昭和四〇(一九六五)年に、岡崎市に在住していた中村久子を訪ね、西羅府仏教会の会報『慈光』に執筆を依頼して書かれたものである。⁽⁷⁾

科学だ、文化だ、宇宙旅行だ、と人は足もとを忘れて、上ばかり向いて夢中になっている現在の時代にも、昔と同じ何様を拝めば病気がなおり、金がもうかる、災難がよけられる、立候補させて投票せねば、お前の家には

病人が出るとか、事故でケガ人が出るから覚悟しておれ、とある家の御主人が、知人におどされて、青くなつて私にしたらよからうかとのことでした。…（中略）…

病氣も災難も貧乏も、自分にあたえられているものは、何でも受けてゆく、すっかりしたものを、なぜ心の底にもたないのでしょうか。…（中略）…

宗教を金もうけや、災難よけや、病氣なおし、ぐらゐに考えるとはもつての外と思います。宗教とは、いかなる境界にも、どんな体でも、生かされている限り、世間にご迷惑をかけないように、正しく強く生きぬいて行くことではないかと思ひます。与えられた境遇を素直にうけて正しく生きる。それが真実の道、宗教の道でございます。

今一つは、仏教といへば、特にご老人の方は、死んでからのことに、考えておられる方もあるようですけれど、死後のことよりも、今日を、否、今の一刹那を、生かされていることを、合掌念仏しなければならぬのでございます。

考えて見ますと、昔父が天理教に入信されて、私の手足の上に御利益をいただいておりますたら、きつと後年は天理教の布教師になつていたと思ひます。

肉体の上に御利益をいただなかつたことは、私の精神上に大きな目に見えないもの、——（金もうけ、災難よけ、病氣なおし、などは正しい教でないこと）を仏さまは私にお恵み下さいました。

人にはそれぞれのご縁がございます故、信仰の初めは、なやみ、災難よけ、などの面からでも結構です。けれども御利益をいただくことのみ目当てにしないで、もっと深く広く「自分を見る」ことを求めてほしいと思ひます。

そして皆で、「無碍の道」を歩こうではございませんか。

人間には絶え間のない苦しみがある。夫に先立たれた妻、子に死なれた親、一生を身うごきすらも出来ないお気の毒な方もあります。どんな境遇の人でも、その苦しみや、かなしみを、ぐちや不平でおわることなく、それを喜びにかえていただくことが、善知識と思わせていただき、われ一人の助かりでなく、人さまにも喜びをお分けさせていただくのでございます。守りに守られているこの生活に（貧しくとも）感謝させられますことも、仏さまよりの大きなおはからいなのです。

両手のある皆さま。お国こそ海をへだてて、異なつた地上に住んでおりますが、仏さまのお守りは決して、異なつてはおらないのでございます。しっかりと手を合わせて、合掌してくださいませ。⁽⁸⁾

神仏は病気を治して下さるものではありません。また神仏に、自分の手足を元々どおりに治して下さい、と祈ることが決して宗教ではございません。何者にもすがらない「安心」の境地の到達点が真の宗教です。

宗教とは肉体を超えた、我利我欲も出来るだけ取りすてて、仏にすべてを委ねる魂の奥深い境地だと思ひます。多くの人々が迷信に走つたり、色々なところに拝んでもらいに行くのは：（中略）：つまり経済的な問題も多分にあると思います。その経済的なものをのり越える気概こそ宗教です。⁽⁹⁾

ここに明らかなように、巷の宗教には、金儲けや災難よけ、病氣治しのようなものが多いが、利益目当ての信仰は真実の宗教ではない。真実の宗教は、いかなる人生でも、どのような身体の状態であっても、生かされている限り、今の刹那を正しく生き抜くことを教えてくれる。すなわち、「何者にもすがらない安心の境地」こそが真の宗教である、と久子は強く語っている。久子にとって真実の宗教とは、合掌して念仏し、仏にすべてをゆだねることであつた。中村久子の見出した真の宗教とは、金儲けや病氣平癒の利益をえることを目的とせず、本願を信じた念仏して、自

己を深く広く見つめられるものであった。久子は利益にすぎることから解放され、如来の大悲に、ないままにいだかれて、素直に生きられる安心を見出している。苦しみや悲しみをそのまま善知識として喜びに変えていったことがわかる。

三 恩徳の真意―親鸞を慕いて

では、中村久子は親鸞をどのように追慕していただろうか。それについては、昭和三六（一九六二）年、親鸞聖人七〇〇回御遠忌の際に、中村久子が記した歌が遺されている。

『親鸞さまを お慕いして』

手足を切斷して 十四年の間

苦痛と貧苦の谷間におちて

いのちのともし灯は

かそけくもゆれていた

このともし灯を消してはならじ

と、あらしの昼も 雨の夜も

守りつづけて 育てて下さったのは

今は亡き大恩ある 父と母のおかげさま

南無阿弥陀仏をとなふれば

この世の利益きはもなし

中村久子の生死観と超越（下）（鍋島）

流転輪廻のつみきえて

定業中天のぞこりぬ

と、おしえて下さったのは

親鸞さま、あなたで御座いました

うつし身の手足の無い

苦しみと悲しみを

最上のえんとして

極重悪人の私を

お救い下さった 歓喜の世界に――

光りかがやく この地上に――

おお 何たる素晴らしさでしょう

真実の仏法のみ教えをきかせて頂き

この大きな幸福を 下さったのは

親鸞さま あなたで御座いました

生きがたくして 生かされている

このしあわせ

遇いがたくして 遇わせて頂く

この大遠忌

ききがかき正法を きかせて下さった

親鸞さま——けふも お念仏の裡に

お慕い申させていただきます

ほんとうに ほんとうに

有がとう 有がとう御座いました

南無阿弥陀仏

宗祖親鸞聖人七百回御遠忌に当り作詩¹⁰⁰

ここに示されているように、手足の無い苦しみと悲しみを最大の縁として、極重悪人の私を救い、歎びを教えてくれたのは、親鸞であると久子は記している。あわせて自分を守りつづけ育ててくれたのは、今は亡き両親であることも記している。この「生きがたくして 生かされている このしあわせ」という久子の感慨は、長い懊悩のプロセスをくぐりぬけ、親鸞の教説に出遇って見出した境地である。すなわち、久子は幼い頃からずっと、手足の無い状態で、苦難や差別を受け、両親や弟、祖母、夫との相次ぐ死別にみまわれて、「なぜ私はこんな目にあわなければならぬのか」と苦悶してきた。その彼女の苦悩のプロセスの中で、常にはたきつづけていたのは、両親の愛情であると共に、祖母の教えと念仏の声であり、親鸞の明かした真実の念仏道であった。救いとは突然の奇跡ではない。雨が大地に沁みて、長い年月を経て、やがて河となつて流れ出すように、長い求道の時を経て、念仏の声がわが身に沁み、仏の大悲が心に満ち満ちて、あるがままで救われていく。ふりかえってみれば、中村久子が真実の宗教に出遇うまでには、実に多くの縁と人々の愛情が重なっている。父親が両手をなくした娘の久子を悲しみ、死に物狂いで真実の救いを求めた姿、母親がわが子と思うが故に厳しくしつけた姿、祖母が久子を特別扱いしないで教育し、「他人を怨まず、念仏申しながら一心に努力して、仏の心に背かぬようにしなくてはならない」と慰めた姿、見世物小屋時代には、書

家の沖六鳳と出遇い、「泥中の蓮になれ」と励まされたこと、座古愛子、伊藤証信、伊藤あき子、ヘレン・ケラーらと出遇ったことが、久子の心の灯となり、障がいを抱えつつ心の糧を大切にして、生き抜く道を開いてくれた。また、福永鷺邦に出遇い、『歎異抄』の心を学び、祖母の称えていた念仏の声が仏の大悲の呼び声となって聞こえてきたこと、あわせて暁鳥敏、金子大栄らの多くの書を読むことを通して、自らの慢心に気づき、苦しい業を抱えたままで念仏の大悲に摂めとられるという深い安心を見出した。さらに久子は、本願の真実に出遇った後も、念仏を称えて自己を見つめつけ、傷ついた自分を慰めたこと、自分自身が家族や多くの人々に支えられて「ある、ある、ある」と感謝して生かされていった。

このように「ご恩とは、私のいのちになっている志願と、それをはぐくむ志願の歴史に気づくこと」であることを、中村久子の生涯が物語っている。この中村久子にみる恩徳に生きる道は、親鸞が、

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし⁽¹²⁾

と示した道と相通じる。すなわち、如来と善知識から受けた恩徳に気づく時、その仏の志願がわが身を貫徹し、自己を突き動かして、世界の安穩のために尽くす生き方を生み出していく。自らにかけられた過去からの恩徳を知るとき、その感動の力が、現在から未来にむかつて縁ある人々に報徳の慈しみとなって広がっていくのではないだろうか。それが知恩報徳の恵みである。

四 晩年の中村久子

中村久子は、七〇歳の時に、次の歌を歌っている。

生かさるるいのち尊し　けさの春

生かさるるよろこびにほふ春の梅

手足なき　身にしあれども生かさるる

いまのいのちは　たふとかりけり

手足なく　六十年はすぎにけり

お慈悲のみに手に　ともなわれつつ⁽¹³⁾

今ここにこのままで生かされているいのちの尊さを深く感得している。「生かさるるいのち尊し」とはどういう意味が込められているだろうか。この自らのいのちは、両親より誕生し、家族や先生に支えられてきたいのちである。そして仏より信心を恵まれ、仏に願われている。自己のいのちでありながら、両親、祖母、夫、子ども、先生という善知識に導かれ、如来に生かされているいのちであるから尊い。中村久子は、自らのいのちを如来に生かされているいのちとして受けとめている。三歳から手足のない身ではあったものの、仏の御手にひかれて歩んできた尊いいのち

であると、中村久子は実感している。こうした意味をこれらの詩からうかがうことができる。

翌年、久子が七十一歳の時には、座古愛子女史の二十三回忌法要を神戸の祥福寺と神戸女学院で勤め、『座古愛子女史の一生』を編集発行した。その本の中に収められている「慈光に照らさるる」には、こう書かれている。

「天の試練としてはあまりにむごたらしい。過し世のさだめとしても悲しすぎる。不自由なお体の上に、まだこんなに迄も苦しまねばならぬ女史を、もういいかげんに許して上げてほしい……。……」

長い一生を厳しい天の試練にあいつつも世を恨まず人を呪わず、しずかに昇天されました事を、後になつて人づてに聞きまして、私には暁の明星が消えたさびしさを味わいました。

この道をかく来よかしと、人世の茨の道を、百万余の身障者私たちの行く手に、教えの灯しびをかかて下さった女史のお心を、自らの心とさせて頂きたいと思ひます。⁰⁴

この中村久子の文章には、重い障がいをもって生き抜いた座古愛子に対して二つの気持ちが表示されている。一つは、座古愛子が重度のリューマチで一生苦しんだことを、「天の試練」と受けとめなくてはならないことへの疑問である。「あまりにもむごたらしい」「いいかげんに許してあげてほしい」という久子の声は、神に向かつて発せられた言葉であろう。もう一つは、座古愛子が久子にとって「暁の明星」であり、多くの身体障がい者の心の灯となつて励ましてくれたことを深く感謝していることである。「天の試練にあいつつも世を恨まず人を呪わず」生き抜いた座古愛子と、久子は尊敬し、宗教は異なつても、座古愛子の心を自らの心として生きたいと、久子は願つたのである。

この翌年、中村久子が七十二歳の時のことであつた。一月三日に脳溢血で倒れた。そしてついに、昭和四十三年三月十九日午前六時五十三分に天満町の自宅で往生された。中村久子の遺言により、彼女の遺体は岐阜県医学部に献体

され、解剖された。中村久子は亡き後も、さらに手足なき身を医療のために捧げつくしたのだった。

結論

中村久子は、生死の苦悩を超える道について、こう語っている。

人生に絶望なし。如何なる人生にも決して絶望は無い。私は今、しみじみとこう叫ばずにはゐられない。少なくともたゆまざる努力と、逞しい意志力の前には道は常に展けて行く。⁽¹⁵⁾

怒ることも、泣くことも、それが尊いご縁です。悲しみを、辛さを、怒りを通して、私のあさましい心根を照らしていただけます。照らさせていただくこと、そのこと自体に、気づかせていただけることが最上の幸せです。⁽¹⁶⁾

逆境こそ恩寵なり。⁽¹⁷⁾

人の命とはつくづく不思議なもの。確かなことは自分で生きているのではない。生かされているのだと言うことです。どんなところにも必ず生かされていく道があります。⁽¹⁸⁾

人間には絶え間のない苦しみがある。夫に先立たれた妻、子に死なれた親、一生身動きすらもできないお気の毒な方もあります。どんな境遇の人でも、その苦しみや、かなしみを、ぐちゃ、不平で終わることなく、それを喜びにかえていただくことが、善知識と思わせいただき、われ一人の助かりでなく、人さまにも喜びをお分けさ

せていただくでございます。

守りに守られているこの生活に、貧しくとも感謝の生まれてくることは、仏さまよりの大きなはからいなのです。⁽¹⁹⁾

水仙が冬の寒い岸壁で、北風に向かつて咲くように、逆縁から人は学び、本当に大切なものを心に咲かせることができる。人は困難に直面する時、「なぜ私はこんな目にあわなければならないのか」と悲嘆する。誰にも代わつてもらえない苦しみの渦中で、どう生きていったらいいのだろう。その答えを指し示す親鸞の言葉が遺されている。

それほどの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ

(『歎異抄』後序)⁽²⁰⁾

この文章は、中村久子自身が、『真宗聖典』に赤い傍線を引いていた所である。現にこの通りの私、どうしようもない苦しい業を背負った私を、仏は抱きかかえる。そのまま、自分が願われた存在であると感ぜられること、そこに深き救いがある。現実を引き受け、自らの宿業が深く自覚されるところにこそ、仏の本願が身と心に沁みってくる。なす術もないこの自分にかけられた悲願に気づくとき、悲しみの中で自分の生きる意味を見出し、生き抜く力が生まれてくる。中村久子は、両親や祖母、夫、子ども、先生に願われていたご恩、両手両足のない身にかけられた仏の悲願を深く感じとった。母のわが子に対する願いそのままが仏の悲願となつて感ぜられたことだろう。父母の深い愛情と縁によって、中村久子は、手足のない身で、生き抜く力を心にしつかりと育むことができた。ふりかえってみると、中村久子は五十九歳の時、自らの人生が手足のない人生ではなく、支えてくれる家族があり、短いけれど何でもして

くれる手足もあると実感し、「ある、ある、ある」と受けとめ直した。「ある、ある、ある」という表現は、手足がないことへの愚痴から、如来の限りなき慈悲にいだかれ、家族の愛情に支えられていることに気づき、あることへの感謝となつて表れた言葉であつた。この「ある、ある、ある」という感謝の思いは、七十歳の時、「生かざるいのち尊し けさの春」「どんなところにも必ず生かされていく道があります」とも表現されるようになった。このように如来にいつも願われ、家族や先生に育まれたのちであるから、生かされている感謝の気持ちで、残された部分を生かして、努力して生きたいという生き方をうみだした。人はひとりで生きているのではない。他の誰かに生かされている。思いのままにならない孤独な自己が仏に願われている。天がすべてを包み、大地がすべてを載せるように、仏は生きとし生けるものを分け隔てなく慈しんでいる。この仏の大悲に突き動かされるとき、一人の小さな存在は、そのままで大悲に満ちた存在となり、世の灯となるだろう。

註

- (1) 中村久子著『生きる力を求めて』、昭和二十六年十月十五日、久子五十五歳、『花びらの一片』一二八～一二九頁。
- (2) 中村久子『無碍の道』、黒瀬昇次郎著『中村久子の生涯』三〇四～三〇五頁。
- (3) 三島多聞「中村久子の生涯」『花びらの一片』一一六頁。
- (4) 中村久子『無碍の道』四四頁、『花びらの一片』所収。
- (5) 『花びらの一片』一一七頁。
- (6) 中村久子口書き『法味手帳』参照、中村久子顕彰会、岐阜県高山市真蓮寺所蔵。
- (7) 『無碍の道』は、後に、昭和五六（一九八二）年の国際障がい年を記念して、藤村文雄らの力によって出版された。
- (8) 中村久子『無碍の道』、黒瀬昇次郎著『中村久子の生涯』三〇五～三〇六頁。
- (9) 中村久子『無碍の道』四七～四八頁、『花びらの一片』所収。黒瀬昇次郎著『中村久子の生涯』三〇六～三〇八頁。
- (10) 真宗大谷派本願寺、宗祖親鸞聖人七百回忌御遠忌にあたり作詞、『花びらの一片』一二四頁、久子六五歳。

- (11) 三島多聞「『恩』中村久子・無手足の大恩」七頁、『報恩講』所収、真宗本廟（東本願寺）。鍋島直樹・三島多聞編『中村久子女史と歎異抄―生きる力を求めて』三四頁、龍谷大学 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター、二〇〇八年。
- (12) 『正像末和讃』（五九）、『浄土真宗聖典全書』二巻四九八頁、『註釈版聖典』六一〇頁。
- (13) 『こころの手足』二二六頁。『花びらの一片』一一八頁。
- (14) 中村久子編『座古愛子女史の一生』一〇七頁、昭和四二年八月六日発行、久子六十九歳。
- (15) 中村久子著『宿命に勝つ』冒頭部分、昭和一八年。三島多聞「中村久子の生涯 生まれて・生きて・生かされて」一〇五頁、『花びらの一片』所収。『こころの手足』二二一頁。
- (16) 昭和二二年四月十六日、東海毎日新聞、中村久子五一歳、『花びらの一片』六一頁。
- (17) 『花びらの一片』六五頁、久子五十九歳、昭和三〇年七月十日愛媛新聞。
- (18) 『花びらの一片』六五頁、久子六十九歳の時の講演、昭和四〇年、『花びらの一片』より。黒瀬昇次郎著『中村久子の生涯』二九二頁、致知出版社。
- (19) 中村久子『無碍の道』、昭和四〇（一九六五）年、中村久子六十九歳、『花びらの一片』四九頁。黒瀬昇次郎著『中村久子の生涯』三〇六〜三〇七頁。
- (20) 『浄土真宗聖典全書』二巻一〇七四頁、『註釈版聖典』八五三頁。

※この拙論は、フィールドワークと文献研究をつづけながら、岐阜県高山市浄蓮寺住職で中村久子顕彰会の三島多聞氏、中村久子の娘、中村富子氏との交流を重ねたことよってまとめることができた。ここに感謝をこめて記しておきたい。一九九二年、七月五日夜九時から、日本テレビによる関口弘の「知ってるつもり」で中村久子女史の生涯が放送された。深い感動があった。一九九七年六月二九日 NHK教育テレビ放送「こころの時代」で、『逆境をあるがままに生きる』が放映された。その深い対談に考えさせられた。それらが縁となって探求が始まった。なぜ中村久子は『歎異抄』にふるえるような感動を覚えたのか。いかにして苦しみから喜びに変容していったのか。それらの真意を知りたかった。以降、中村富子氏との文通がはじまった。また、岐阜県飛騨高山の真宗大谷派高山別院、中村久子女史顕彰会の真蓮寺を訪ねるようになった。三島多聞氏

には、二〇〇六年秋冬の「死を超えた願い」展の開催にあたって、初めてご連絡し、中村久子の遺品数点をお借りし、三島多聞氏に龍谷大学において特別講演をいただいた。特に、二〇〇八年秋冬に「中村久子女史と歎異抄」展を龍谷大学パドマ館で開催するにあたり、飛騨高山を訪ねて、三島多聞氏や中村久子の次女、中村富子氏に面談して、中村久子の生涯と思想を聞き学んだ。三島多聞編『花びらの一片』は、中村久子が真実を求めた道をまとめたものである。『花びらの一片』をくり返し読むうちに、新たに発見する世界があった。二〇〇八年八月十九日、三島多聞氏は高山の真蓮寺に訪れた私に対して、優しく深く中村久子の世界を聞かせてくれた。そして貴重な中村久子の遺品を何も計らうことなくお貸しくださった。中村久子の肖像などの写真についても、展示に際して必要ならば自由に使うことを許してくださった。三島多聞氏は、「中村久子女史」自身の気持ちは、手足に恵まれている私たちがどれだけ思ってもわからない経験であるけれども、中村久子女史の表した真実の言葉と、それを支える聖典の真実の言葉との往復運動ができるような研究を進め、人々に知っていただけたらいい」と助言いただいた。深く感じる言葉であった。中村富子氏とは以前、拙著『アジャセ王の救い』を送付したことをご縁にして、互いに文通が始まり、先方から瀬上敏雄氏の本や中村富子氏ご自身の本『合掌に二重まる 心に満点』がある、ある、ある」の世界に生きた母・久子の四肢のない人生』（ぎ・ほんちわーく）や藤木てるみ著『光の人 中村久子』（マンガ伝記 探究社）などを寄贈いただいた。さらには、中村久子女史の愛読していた書物や口書きの色紙をいただいた。二〇〇八年に『中村久子女史と歎異抄―生きる力を求めて』の展示を龍谷大学で開催し、特別講演会を開くことができたのも、中村久子の世界に触れることができたのも、三島多聞氏や中村富子氏、そして中村久子女史顕彰会の支援があったおかげである。二〇一一年の東日本大震災のあった年には、親鸞聖人七百五十回大遠忌法要が勤修され、中村久子女史「人生に絶望なし」という特別展観と記念講演会が東本願寺で開催された。彼女の言葉は、今も人々の心に支えとなって生きている。

キーワード 中村久子 『歎異抄』 親鸞 人生に絶望なし